特集　夕張市長 厚谷司 × サングリン太陽園 代表取締役社長 北濱宏一　スペシャル対談

日本の最先端モデルをめざして

夕張市とサングリン太陽園の今、そしてこれから

サングリン太陽園は2023年4月に夕張市と包括連携協定を締結し、
ドローンやデジタル技術を活用した地域づくりに協力して取り組むことになりました。
ドローンやITの持つ可能性とそれを生かした将来展望について、
夕張市の厚谷司市長と共に考えます。

夕張市とタッグを組み包括連携協定をスタート

北濱　今年も夕張メロンの初競りがニュースで報じられていましたね。毎年のように落札額が大きな話題になりますが、これほど社会から注目される農産物は他にはないのではないでしょうか。

厚谷　ありがとうございます。夕張市にとって夕張メロンはかけがえのない宝です。日本で一番有名なメロンといっても過言ではないと自負していますし、当然ですがその宝を未来に引き継いでいかなければならないと考えています。

北濱　唯一無二の宝を守るには地域の農業を存続させることが重要になりますね。その一方で、人口減少や高齢化の進行に歯止めがかからず、特に北海道は全国ワーストになるほど人口減少が顕著になっています。また、農業人口も減少が続き、道の統計によると2005年から2021年までの間に経営体数が約4割も減少しました。

厚谷　当市においても最大の課題は人口減少と高齢化です。2022年には人口が7000人を下回りました。また、現在は65歳以上人口が5割を超え、高齢化率が54％近くになるなど、日本で最も高齢化率の高い市となっています。この状況を食い止めるのは難しいとしても、進行のスピードを抑制したり、高齢になっても暮らし続けることができるようなまちづくりができればと考えています。

北濱　具体的にはどのような対策を図られているのでしょう。

厚谷　一つが前任の鈴木直道市長のときに打ち出した「コンパクトシティ構想」です。現時点では、市民が暮らすエリアを3カ所に集約し、そこに生活に必要な機能や施設を整備することで、行政サービスや暮らしを維持させていく計画です。また、今後は冷涼な気象条件を売りに、新たな企業誘致なども進めたいと考えています。ただ、そうした取り組みは行政側の考えや努力だけでは限界があることも、過去の経験から承知しています。御社のような民間企業の力もお借りしながら、新しい視点を取り入れていくことも必要になるでしょう。

北濱　半世紀以上に及ぶ当社と夕張市との関わりの中で、2023年4月6日にはドローンやデジタル技術の活用による地域振興を目的に、包括連携協定を締結させていただきました。人口減少や労働力不足は当社にとっても大きな課題です。夕張が積み重ねてきた知見と当社が持つ技術とを結び付けることで、DXやスマート農業などの推進を図り、課題解決につなげていくことができればと思っています。

厚谷　多様なノウハウを持つ御社との連携は心強い限りです。当市では、実質赤字を解消する2027年を新たなまちづくりのスタートと捉えています。今後のまちづくりを進める上で、デジタル技術の活用は不可欠な要素です。御社からご提案などもいただきながら、夕張市の未来の姿を一緒に考えていければと思います。

対談を行った日に、ゆうばり小学校3年生の子どもたちが北日本スカイテックの施設見学のために来社。無人ヘリコプターのデモンストレーションやドローンサッカーを楽しみました。

サングリン太陽園と夕張市の軌跡

▼1958年（昭和33年）
夕張市農協と取引を開始

▼1960年（昭和35年）
夕張メロン組合への農業用ビニールの供給および施設栽培技術の指導を開始

▼1987年（昭和62年）
ハウス用ビニールも生産する農業用ビニール加工場を夕張市内に設立（現：夕張事業所）

▼1997年（平成9年）
夕張市農協創立50周年記念式典にて、地域農業支援の実績を認められ、感謝状を拝領

▼2009年（平成21年）
ECサイト「北海道うまいもの農園」を開設。夕張市農協と提携し、夕張メロンのオンライン販売を開始
夕張市農協と共に、夕張市教育委員会にメロンハウス式の「温室プール」を寄贈

▼2010年（平成22年）
夕張市「幸福の黄色いハンカチ基金」に協賛開始
夕張メロン組合創立50周年記念式典にて感謝状を拝領

▼2011年（平成23年）
東日本大震災で被災した福島市の子どもたちが夕張市を訪れる「夏のリフレッシュ体験」に花火協賛
「北海道うまいもの農園」の売上から漁船購入のための義援金を、岩手ふるさと農協を通じて陸前高田市広田湾漁協に寄贈。漁船は「夕張めろん丸」と命名される

▼2012年（平成24年）
東京都の高校生が対象の「高校生夕張キャンプ2012」に協賛

▼2014年（平成26年）7月～
（株）サングリン太陽園が夕張市スポーツ施設ネーミングライツに参加。平和運動公園をサングリンスポーツヴィレッジ、野球場をサングリンスタジアムと命名

▼2023年（令和5年）
夕張市と包括連携協定を締結

夕張市長

厚谷司

Atsuya Tsukasa

×

サングリン太陽園 代表取締役社長

北濱宏一

Kitahama Koichi

●プロフィール
1965年、夕張市に生まれる。夕張北高等学校を卒業後、夕張市役所入職。2011年より夕張市議会議員を2期務めた後、2019年より現職。生まれ育ったまちへの愛着を原動力に財政再生計画を牽引し、夕張市の未来像を描く。

●プロフィール
1957年生まれ。大学卒業後、大手医薬品メーカーでの勤務を経て1986年にサングリン太陽園入社。営業や本社の実務経験を積んだ後、1988年に取締役となり、1994年から代表取締役社長に就任。

ドローンやICTを活用した地域振興と新たな魅力づくり

北濱　当社は、包括連携協定によってドローンやICTを広く活用することで、市民生活の向上や魅力ある地域づくりなど、新たな価値の創出をめざしています。今後は教育や防災、物流など8つの項目について連携しながら取り組んでいく計画です。すでにご提案している教育現場での取り組みでは、当社やグループ会社の北日本スカイテックが持つドローンやICTに関するノウハウを、学校の授業などに還元したいと考えています。児童・生徒さんの見学の受け入れや、プログラミング教育の提供は、実現に向けて一部が動き出しています。

厚谷　プログラミングやドローンを教育現場に導入することは、教育の大きな魅力づくりになりますね。都市部と同様の教育環境を整えるのはなかなか難しい状況ですが、未来の担い手に夕張に残ってもらうためにも、特色ある教育環境づくりは重要なテーマといえます。

北濱　2022年からドローンの操縦ライセンスが国家資格になりました。例えば、夕張高校にドローンのライセンスを取得できるカリキュラムがあれば、他校との差別化になりますし、若い人にアピールできるのではないでしょうか。

厚谷　そうですね。夕張高校は存続の危機に立たされた時期もありましたが、高校の魅力化に注力することで、2024年は入学者が増加に転じました。魅力化の取り組みの一つとして、ドローンは訴求性の高いツールになると感じています。いつか、ドローンを使って地域の課題を解決しようという生徒さんが出てきてくれたらうれしいですね。

北濱　北日本スカイテックではドローンの国家試験の受験会場としてゆうばり文化スポーツセンターを申請しました。今後は、夕張市でドローンの最終試験を受けられるようになる予定です。多くの方に利用していただきたいですね。

厚谷　そうした取り組みによって「夕張＝ドローン」というイメージを持ってもらえるようになれば、魅力あるまちづくりのコンテンツになると考えています。

北濱　教育以外にもさまざまな展開が考えられます。どのような可能性があるのか、一緒に考えていけたらと思います。

厚谷　将来的にはドローンを市の中心から離れて暮らす方々への物流のサポートや、災害時の物資輸送などにも活用できればと考えています。また、山林火災などが起きた際、ドローンを飛ばして被害状況を把握することで、消火活動の効率性を上げることもできます。そうした市民生活の利便性向上や災害対応への活用も期待しています。

2023年4月6日、夕張市とサングリン太陽園は包括連携協定を締結しました。

夕張市を日本の先進地にデジタル技術が開く可能性

厚谷　夕張市は実質赤字を解消する2027年が目前に迫り、次の一歩を踏み出すフェーズに入っています。人口減少率や高齢化率の高さなど、課題は山積みですが、置き換えればそれは日本の未来の姿でもあります。

北濱　おっしゃる通りです。過疎地の課題は日本が抱えている課題でもあります。人口減少や財政問題など、夕張は先行的に取り組んでいる。そこで何か成果を出すことができれば、夕張が日本の最先端になることも可能だと考えています。

厚谷　夕張メロンの生産者も担い手不足や労働力不足などの課題を抱えています。夕張メロンは高度な栽培技術が必要なため、新規参入を希望する人が少なく、受け入れる側の体制も十分とはいえません。ただ、従来のままでは縮小していくだけですので、新しいことにチャレンジする必要があると感じています。

北濱　ICTを活用したイメージ戦略など、新しい仕掛けをしてみるのはいかがでしょう。

2024年1月に夕張市の地域振興課、教育委員会、小中学校校長などが北日本スカイテックを訪れ、施設見学やドローンサッカー体験などをしました。

厚谷　今年の4月にJA夕張市が「夕張メロンメタバース」を開設しました。そうした流れを見ると、大きな転換点にきているのを感じます。御社にもアイデアをいただきながら、何ができるのかを考えていきたいと思います。

北濱　もちろんです。できることを共に考える中で、新しい価値や可能性を見出すことができればいいなと。さらに、それが日本の最先端モデルになれば理想的ですね。

厚谷　夕張は山間地で大規模な農業が難しく、一般の作物ではなかなか収益を上げられないという環境の中、高収益のメロン栽培を確立したという歴史があります。つまり、夕張はこれまでも逆境にさらされ、それを克服してきたわけです。今回も財政破綻を乗り越え、日本最先端の地域をめざしていきたいですね。

北濱　現代はGDPなどの経済面重視から、個人や社会が満たされているウェルビーイング重視へとシフトしてきています。デジタル技術なども活用することで、地域の成長やウェルビーイングな地域づくりのお手伝いをしたいと思います。

厚谷　夕張市民が幸せに生きていくためには、変革を起こす必要があります。御社の力もお借りしながら、新しいまちづくりに挑戦していこうと思います。

北濱　私たちも、さまざまな情報発信を含めて、これからも夕張市を応援していきます。本日はありがとうございました。

当対談は2024年5月30日に北日本スカイテックの施設「TECHNOLOGY FARM 西の里」において開催しました。